

桑乾そうかんを渡わたる（賈島かとう）

客舍并州已十霜 歸心日夜憶咸陽
無端更渡桑乾水 却望并州是故郷

客舍かくしゃ 并州へいしゅう 己すでに 十霜じっそう

歸心きしん 日夜にちや 咸陽かんようを 憶おもう

端無はしなくも 更さらに 渡わたる 桑乾そうかんの 水みず

却かえつて 并州へいしゅうを 望のぞめば 是これ 故郷こきよう

解説 この詩は十年もの間滞在した并州から北方に向かうとき、桑乾河をわたり、并州をふり返り作つたもの。

語釈 ※桑乾〓河の名。※客舍〓旅住まいの意。※十霜〓霜の期間は一年に一回。したがって、十年をいう。※咸陽〓秦の首都であった。ここでは長安を指す。※無端〓思いがけなく。※故郷〓ここでは都長安をいう。

通釈 并州に旅ぐらしすることはや十年。都の長安に帰りたいという気持は昼も夜も募もつるばかり。それが思いもよらず、さらに桑乾河を渡つて北へ行く事になった。振りかえつて并州を望むと今は故郷のような感じさえする。